

「バラード1番」、すごく丁寧大切にする心の表れ、澄み切ったキレイサ。全体像を見通した展開に気持を注ぐ、不安なし信頼のおけるもの。構成組み立て不安なし、信頼のおけるもの。洗練ストレートなアプローチ、ブリリアントな打鍵。よく知られた曲だから自分なりの解釈を、そんな意識が慎重を少し後押し。「バラード2番」、音楽のツクリ、パッセージの妙、新鮮な発見の喜び。作品の本質いやピアニストが感じる、エッセンスの抽出、単に穏やか美しモードであるに過ぎない。バラード全曲演奏、ここではその精神的重圧からの脱却。

「バラード3番」、ノックからピアニストが聴かせたいと思う音、作曲家に対して自分の現在の音樂性を問うて、作品の持つ特色や美しさを感じて素直な表現、感情のダイナミックな出し入れ、無理なく大きく舞う。「バラード4番」、優しい眼差し柔らかな感性、壊れものを扱う様な。激情に溢れたショパンもアリだろうが、繊細なニュアンスのままごく自然に。若い時分の新鮮さと熟練を重ねたタフさで全体像の構築、感情の逆りの制御、オリジナル工夫ピアニストのパレットの色特有なタッチ。

「幻想即興曲」、穏やかなスタート号砲、キレイな粒立ちでの上昇下降、縦横無尽なイメージ・ワールド。軽やかランニング・ステップ、ピリピリ緊張感は希薄、一気呵成の腕見よがしの強引さなし、煌びやかだが爽やか。夢見るようなファンタジー、うつとり心地よさ、地についたクリアランス。ウィーン風タッチ、いやピアニストのオリジナル。広がる優しい音樂性、クレバーなコントロール下。夢からの目覚め、清澄さ覚醒感。

リストの「オーベルマンの谷」、堂々たるクライマックス、スペクタクルでドラマチック。切々感情起伏、朗々高々モノローグ、この作曲家の魅力ある素敵な特徴。適確に表現、冴え冴えたる熱気の濃密スペース。それに至る迷いと悩みのネガティブ弦音、気弱な若者オーベルマンさん。テンション少し沈み込み過ぎ、効果コントロール計算の結果、スタジオ録音の陥穀、ライブなら聴衆の反応で補正可能だが。

ご主人の書かれた「はじめに」を拝見。愛する奥方へのおノロケならずして、奥さんが持つ特質への尊敬に満ちた讃歌。サポートー・リーダーの応援たらんメッセージ。(2010.5.31)

ショパン：バラード 1番 ト短調 Op.23

ショパン：バラード 2番 ヘ長調 Op.38

ショパン：バラード 3番 変イ長調 Op.47

ショパン：バラード 4番 ヘ短調 Op.52

ショパン：幻想即興曲 嬰ハ短調 Op.66

リスト：コンソレーション 3番 変ニ長調

---

リスト：「オーベルマンの谷」巡礼の年1年 スイスより

---